

【京都府青少年育成協会会長賞】

「障がい者と健常者って…」

亀岡市立南桑中学校 2年 宗川さくら

「不便だけれど不幸じゃない。」

この言葉をみなさんは知っていますか。これは目が見えず、口がきけず、耳も聞こえなかったヘレンケラーの言葉です。私はこの言葉を目にした時、不思議な感覚になりました。そして、障がいがあることってどんなことだろうと真剣に考えるようになりました。駅やデパートで障がいのある方を見ると、私はなぜだかすごく気にかかるのです。最近ではバリアフリーの整った施設も増え、障がい者の方も生活しやすくなっているのかな、と嬉しく感じる心が私の中で大きくなっているのです。

でも、周囲の人を見てみると、何となく距離を置いている人が多いように感じます。

私も今まで、障がいのある人を見て、「しんどそうやな」「かわいそうやな」「自分のことを恥ずかしく感じたはるのかな」と、無意識に考えていました。しかし、その決めつけは、「障がい者への差別」をしているのではないかと思うようになりました。特別支援交流活動に参加して強い個性のある人たちと触れあうことで、そのことに気がつきました。「かわいそう」と感じている時、私たちは障がいのある人の何を見てそう感じているのでしょうか。私たちが当たり前に出ることが難しかったりすることでしょうか。私たちは心のどこかで優位に立っているように感じてませんか。確かに、健常者より少し時間がかかり、不自由なことは多いのかもしれませんが。人の手を借りないと暮らしていけない人もいます。でも、それは不便であっても不幸ではないはずです。

1年前に、神奈川県知的障害者施設で46人もの人が次々に刃物で刺される事件が起こりました。事件を起こした加害者は、「障がい者は役に立たない。」「障がい者は不幸しか作れない。」と言ってのけました。

私は、役に立つかどうか、幸せかどうかの基準で生きることを決める考え方が理解できません。そんな考え方だと、親に面倒をかけている私たちだって役に立っていないことになってしまいます。まして、幸せや不幸はその人が感じることで、他者が決めることでは決していないと思うのです。障がいがあっても健常者であっても、幸、不幸は毎日感じられ、その深さは他の人には推し量れません。私は、この世の中に、その人の一生を通して、完璧な健常者なんているのだろうかと思っています。誰だってどこかに不自由な部分があると思うし、人生の中で歳を重ねるごとに何らかの機能を失うこともあるはずです。その時、「あの人は障がい者よ」という目で見られるのは本当につらく、逆に、障がいをもっている人を見て、何も感じずやり過ごしてしまう人にも悲しさを感じます。

先日デパートで車いすの方が困っている所を見かけました。段差に車輪が引っかかり、身動きできないようでした。周りの人たちは気にかけても、誰も助けませんでした。少し離れた所にいる私も周りの人に期待しているだけで、何も出来ませんでした。その時、父が駆け寄り、「お手伝いしましょうか。」と尋ね、車いすを少しだけ移動し、車いすは動くようになりました。その女性は「ありがとうございます。」と言って、場所を移動されました。父の行動は決して押しつけではなく、その方の気持ちをきちんと確認していました。その行いは、たった10秒の出来事でしたが、なんだかとても大事なことだと感じたのです。障がいのあるなしに関わらず、困っている人がいれば気軽に声をかけられる人に私もなりたいと思います。

障がい者・健常者ってどこかで線を引くのではなく相手の立場に立って私が今できることを考えていきたい。そして、現状をもっと知り、もっと学び、私自身の中にある心のバリアフリーをどんどん広げていこうと思っています。